



# 初めての体系的な中国人口資料

中嶋 嶺 雄

——『ドキュメント 中国の人口管理』をよむ——



なかじま・みねお（東京外語大学教授）一九三六年、松本市生まれ。東京外語大中国科卒。東大大学院卒（社会学博士）。現代中国学。著書『現代中国論』『中ソ対立と現代』『北京烈烈』『中国の悲劇』他多数。

もう三十五年前になるが、私が学生の頃に読んだ仏ル・モンド紙のアジア通、ロベール・ギラン記者の鋭い中国ルポには、『六億の蟻』というタイトルがついていた。当時、六億前後だった中国の人口は、本書が採用している最新の人口センサス（一九九〇年）の結果によってもすでに十一億五千万に達しており、現在は十二億もしくは実際にはそれを上回るオーダーに達しているといえよう。つまり、この間に中国の人口はほぼ倍増しているのである。

一方、森林被蔽率が国土の十二パーセント前後（日本は約七十パーセント）で、緑がきわめて少ない中国大陸は、可耕地面積が日本列島の三・七倍程度と推定されている。そのうえ、人口の大部分は依然として農業に従事しているから農地を大量に確保せねばならず、現実には日本列島以下の面積に約十倍の人間群がひしめきあっていることになる。都市および都市圏（帯西市）の

人口稠密度は、まさに恐るべきものだといわねばならぬ。

それだけに、一人っ子政策による「人口管理」が嚴重に施行されているのだが、にもかかわらず、また、一人っ子政策が生み出す様々な弊害をよそに、中国は最近、年々一七〇〇万前後も人口が増えている。

このように見ただけでも、中国の人口問題は、いまや、たんに中国だけの問題ではなく、全人類の大問題だといえよう。

本書は、そのような中国人口問題に関して収集し得るかぎりの資料を編集・訳出した決定版として、まことに意義深いものである。中国国務院や国家統計局、中国共産党中央などの国家レベルの法規や統計のみならず、省・市・自治区の一人っ子条例や地域末端の人口管理政策、戸口（戸籍）制度と流動人口管理の実態、高齢化と社会保障の問題にまで目を配って、最新のデータを網羅

# 『ドキュメント 中国の人口管理』



若林敬子／編  
杉山太郎／監訳

亜紀書房・刊  
定 価 8,240円  
A 5 判／470ページ

したものは、私の知るかぎり、世界にも例を見ないのではないか。本書はわが国の学界やビジネス界、官界のみならず、広く中国問題に関心をもつ読者に是非とも推奨したいと思う。

私はかねてから、欧米の大学・研究機関では、「人口学」(demography)の講座がかなり整備されているのに、わが国にはそのような分野が未確立であることに、問題を感じてきていた。この点で本書の編者・若林敬子

氏は、社会学のディシプリンを習得されたうえで、このところ一貫して中国人口学に取り組んでこられ、中国各地へのフィールド体験も豊かな数少ない存在である。私が若林氏の業績に注目したのは、かつて内蒙古自治区を訪れたとき、かの地でも一人っ子政策を推奨するスローガンや産児制限指導班に出会って、それぞれの省・自治区が

どのような一人っ子政策をとっているのかを知ろうとした折に、同氏がすでにこの点でのすぐれた業績をもっていることを知ってからであった。同氏の編集・解説による一九八三年刊の『中国人口問題』(『現代のエスプリ』No. 一九〇、至文堂)も目を見張るべきものであったが、このような業績のうえに、長年の協力者、杉山太郎氏の監訳によって本書が成っているのである。

私は昨年春に福建省を訪れたとき、廈門市公安局の一派出所前に、「農村人口が都市人口に転ずることに關する政策——閩公發(八九)〇〇一号文件——」という布告があるのを偶然に見つけた。そこには、農村から都市へ転出し得る条件の一つとして、「都市に四十五年以上住み、職歴が二十五年、都市での結婚歴が五年以上の者で、その配偶者の農村での生活が困難な者もしくは十八歳以下のその子女は、証明書をつけて公安局に申請すれば許可証を得る可能性がある」といった表現があり、想像を絶する厳しい「人口移動管理」がおこなわれていることを現地でも知って驚いた経験がある。それなのに、農村から都市への人口移動(いわゆる「盲流」)は今日もなお続いている。

こうした中国人口問題の謎をとくカギをも、本書は提供してくれるだろう。